

## 勸修寺大法房実任について

研究員 増山 賢俊

これまで院政期から鎌倉期の真言僧の事績を見てきたが、今回は勸修寺大法房実任（一〇九七～一一六九）を取り上げる。

実任は、石山寺聖教・高山寺聖教に名を残し、勸修寺理明房興然（一一二一～一二〇三）の師として知られ、勸修寺流の正嫡ではないが、興然の師として勸修寺流の中で後世に大きな影響を与えた人物である。先に取り上げた石山寺文泉房朗澄（一一三二～一二〇九）も実任から付法していた。興然の師としての側面でしかあまり知られてこなかった実任の事績について、知り得たことについて報告する。

実任の伝記に関する資料は少なく、詳細は明らかではないが、興然に対する伝授記録が多い。興然への伝授記録は高山寺経蔵の目録の奥書等に数多く見る事ができる。これらには「大法房」・「実任」・「*ma ha*」などによつて実任が示されている。さらに東寺観智院金剛蔵本『真言付法血脈図』・『血脈類集記』・醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』・『野沢血脈集』等の血脈類や『四巻鈔』・『伝燈広録』等その他に見られる記録などを参照し、知り得る限りの事績を調べ、年譜の形にまとめた（拙稿「勸修寺大法房実任における法流受授と年譜」『智山学報』六四輯）。

これらの資料から、実任は大治三（一一二八）年三十二歳の時には小野阿闍梨蓮光房良勝（一〇七九？～一一五九）（一一六一以降か）と交流を持ち、良勝から保延三（一一三七）年九月二十三日に四十一歳で灌頂を受けている。康治三／天養元（一一四四）年四十八歳の時、更に師位を得

て、禅林寺に蟄居したとあるが、その後も勸修寺における興然への授法記録があることから、勸修寺でも活動していたのであろう。また、良勝より「寅時印信」を授けられている。興然への伝授は仁平四／久寿元（一一五四）年以降記録が見られ、平治二／永暦元（一一六〇）年以後、朗澄への伝授記録が現われる。実任と興然・朗澄との関わりは、良雅——覚心——実任と伝わる「臨終大事」が最後である。また、権少僧都経円や源秀とも関わった記録があるが、どのような人物であつたか定かではない。仁安三（一一六八）年以後は禅林寺（栗田口）での活動記録しかなく、仁安四／嘉応元（一一六九）年に入滅するまで禅林寺に住したのだろう。

実任は良勝より勸修寺流を受法したが、ほかにも増俊、嚴覚、覚心、懷誉、覚鏝等から多くの法流・口決を授けられている。また、勸修寺流だけでなく、広沢流の伝も受け、様々な法流・口決を幅広く受法した勸修寺僧と考えられる。付法の弟子で詳細が分かっているのは興然と朗澄のみであるが、いずれも大きな業績を残している。そのような彼等に大きな影響を与えたという意味において実任もまた重要な人物である。